
輪り廻る時空の中で

円藤杷菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪り廻る時空の中で

【Nコード】

N0628X

【作者名】

円藤杷菜

【あらすじ】

彼は私を「まさ」と呼ぶ——。高校二年になった三井真咲の前に現れたのは下級生の原田舜だった。執拗に真咲に拘る舜と、何故か彼を拒みきれない真咲。「人違いです」——本当に人違い？「俺は……ずっと、お前を探していた」——私は彼を知っている。きつと、ずっと昔から……。 (タイトル変わるかもしれませんが。スローペースに更新する予定です)

人物紹介

輪^{まわ}り廻^{めぐ}る時^{とき}空の中で私たちは出会った……。

彼は私を「まさ」と呼ぶ。

高校二年になった三井真咲の前に現れたのは下級生の原田舜だった。

執拗に真咲に拘る舜と、何故か彼を拒みきれない真咲。

「あの、すみません。私、あなたの言う『まさ』じゃないです」

本当に人違い？

「俺は……ずっと、お前を探していた」

私は彼を知っている。きっと、ずっと昔から……。

「……この世のみならぬ……契りなどまで、頼め給ふ」

三井真咲

「俺には真咲しかないこと、わかってるから」

原田舜

「本当はわかってるんだろ、自分の中では」

大川創史

「舜は今も昔も、真咲ちゃんしか見えてないんやで？」
ながくちうた

永倉 橙太

「ねえ、自分に素直になってみたらどう？」
さわぐちかえで

沢口 楓

「ずっと待ってたんだと思う、あいつらを」
みついますみ

三井 真澄

じれったい高校生の輪廻転生ラブストーリー。

「いい人すぎて困る」

ぼんやりと頬杖について窓の外を眺めていた。ばたばたと真新しい制服を来た生徒が駆けている。

二年になると、教室は三階に移動した。私の教室からは学校の門と、立ち並ぶ桜の木が見えている。風が吹くたびにふわりと花弁が舞う。それが好きで堪らないのだ。

「もう始業式終わったのに帰らないの？」

にっこりと笑ったのは、昔からの付き合いの沢口楓^{さわぐちかへで}だった。それにこくりと頷いてから、この後の予定でもある新入生の校内オリエンテーリングのプリントを見せた。

これは二年の学級委員が、一年生に校内見学をさせるという毎年恒例の行事だ。三年は晴れてお役御免となるのだが、二年の学級委員はこれが終わるまでは帰れないのだ。面倒臭いものの、こればかりは仕方のないことだった。

楓は眉を下げて笑いながら『どんまい』と肩を叩いてくる。本当に。推薦なんて言えば聞こえはいいけど、要するに押し付けられた体だ。面倒臭いとも言えず、そのまま私が学級委員となってしまったのだが。

「大川とでしょ？ いいじゃん、アンタら仲良しだし」

もう一人の学級委員は大川創史^{おおかわそし}くん。一年の時から同じクラスで、同じ図書委員をしていた。そしてまた、同じ学級委員になったのだ。その時は大川くんと顔を見合わせて笑った。彼は『こればかりは仕方ないよなあ』なんて困ったように笑っていた。

「大川くん、本当にいい人。いい人すぎて困る」

はああ、とため息を吐きながら頭を抱えた。

そうなんだよ。大川くんって超いい人なんだよ。嫌なことあっても嫌って言わないような人なんだよ。だから、私とじゃ不釣り合いだとかって陰口言われるんだよ。面倒臭い。本当に、心底女子って面倒臭いと思う。

それで、大川くんはいい人すぎるから何も言えない。性格悪かったり、俺カッコイイでしよって言うタイプの人なら『近寄りたくない』で切り捨てられるのに。大川くんはいい人すぎてそんなバツサリ言えない。私、チキン。

背後から、ふは、と笑い声が聞こえた。目の前にいる楓は笑っていない。ということは……と後ろを振り返れば、案の定、お腹を抱えて笑っている大川くんがいた。

「はは、それ、良い様に受け取ってもいいの？」

楓は臉をぱちぱちと上下させた。普段の大川くんはにこにこしているけれど、こうやって笑ったりはしないからだろう。私は、見慣れてしまったのだが。みんなが思う以上に彼は笑い上戸なのだ。

「大川くんの捉えたいようにどうぞ。もう行きますか？」

——なぜ、敬語なのか。

答えは簡単。私は楓にしかタメ口を使わないからだ。先生だけでなく、大川くんも同学年の女子にすら敬語だ。深く関わらないための伏線とも言えようか。まあ、それなりに友人はいるのだが。

笑いすぎて引き笑いになりつつある大川くんを引っ張って、学級委員の集合場所に向かう。楓は若干引きながらも手を振って苦笑し

ていた。

「俺、三井が言うほどいいヤツじゃないよ？」

「本人説なんて役立ちませんよ。客観的に言ってます」

本当に、私が思っている以上にいい人じゃないのかも知れない。それでも、大川くんが思っている以上にいい人ではあるはずだ。主観的なものさしと、客観的なものさしは違うのだから。自分のものさしで、自分は計れない。

スタスタと歩き続ける私の隣に大川くんが並んだ。まだ少し笑いが残っているらしくて、お腹を押さえている。その手にはオリエンテリングの行き先の順番が書かれた紙を持っていた。きっと、ギリギリまで確認でもしていたのだろう。そういうところが、彼のいいところだと思った。

「――まさ……」

お腹を抱えていた大川くんが思い出したかのように呟いた。上を向いていたのは、クラスを確認していたかららしい。

「はー……あ、一年四組」

私たち二年四組が担当するのは、一年四組。

教室の前に辿り着くと、大川くんは目尻を拭ってから身嗜みを整えた。私もそれに倣ってきちんと整えておいた。

ガラリと教室の扉を開くと先生と目が合った。とりあえず会釈だけしておくと、私は新入生の方に向き直る。あとは全て大川くんに任せておいてもいいのだろう。隅っこに立っていたら、大川くんに手首を掴まれて引っ張り出された。

「えー、二年四組の学級委員です。オリエンテーリングを担当します、よろしく願います」

大川くんに合わせて会釈をしてから、新入生を見回す。まだ真新しい制服はどことなく似合わなくて、幼さの残った顔が印象的だ。その中で一際目立っているのが、金髪の男の子。その隣には赤に近い茶色の髪をした男の子がいたのだ。黒髪だらけの中にある金色と赤茶色は、やけに目立っていた。

大川くんも同じところに目がいったのか、聞こえないような小さな声で『すげーな』と呟いていた。うん、本当にすごいよね。染髪禁止の学校なのに堂々としているということは、あれが地毛なのだろうか。

そう思って再び二人に目をやると、赤茶色の髪の男の子が顔を上げた。金髪の男の子が肩を叩いて呼んだらしい。目が合った瞬間、

彼は目を見開いて立ち上がる。勢いに負けた椅子は倒れ、ガタンと派手な音を立てて倒れた。

「えっ、舜？」

隣の高髪の男の子も目を見開いて、口をあぐりとさせている。大川くんも驚いたような顔をしていて、私と舜と呼ばれた彼を交互に見やる。知り合いかという大川くんの素朴な疑問に、首を横に数回振った。

だが、彼はどんどこちらに歩いてくる。思わず大川くんの後ろにでも隠れようとすれば、思い切り手を引かれた。そのまま彼に抱き込まれてしまった。隣にいた大川くんは目を見開いて……いや、大川くんだけではない。クラスの全員の注目の的だ。

「……まさ……」

明らかに人違いじゃないですか、それ。

痛いくらいに抱き締められながらも、私は眉を潜めた。私は『まさ』なんて呼ばれたことはない。

とん、と彼の胸を手をつくと驚いたような顔をされた。一瞬、ほんの一瞬だけ、その目に見覚えがあるような気がしてしまった。髪と同じ、赤茶色がかった瞳。ずっと昔、この人を見たことがあるような気がした。

「あの、すみません。私、あなたの言う『まさ』じゃないです」

少し距離を空けると、高髪の男の子が走ってきた。赤茶色の男の子は高髪の子に、私は大川くんによって引き離される。ふう、とため息をついて一歩後ろに下がった。

よく見てみれば、赤茶色の男の子は端正な顔立ちをしている。背

もだいたい一七〇後半くらいか。きつとクラスでも目を付けた子がいたのだろう、何人かがため息を吐いて眉を下げていた。

うって変わって、金髪の男の子は高校生には見えないほど若い顔立ちをしている。背も一六〇前半ほどのようで、まだ可愛いと言った方が正しいような気がした。ピアスがやけに目立つ。

「舜、いきなり何してん？ 人違いで抱きつくとか迷惑やぞ？ 羨ましい」

——心の声が漏れてますよ、金髪少年。

小さくため息を吐く。大川くんは二人を見てから、ハツとしたように時計を見て手を叩く。どうやらオリエンテーリングの時間が迫ってきているようだった。とりあえず、この話は保留ね。そう言つて大川くんは笑った。

「とりあえず、廊下に並んでください」

二人の脇を通り抜けて、廊下に出る。ぞろぞろと出てくる新入生を見て、大きくため息を吐いた。

「三井、大丈夫？」

「はい。少しびっくりしただけです、問題ありません」

そう言つて頷くと、大川くんは安心したように息を吐いた。本当に、驚いただけだった。彼は特に嫌だとは思わなかったのだ。むしろ、何故かわからないが安心感のようなものがあつた。口が裂けてもそんなことは言えないが。

彼と会つたのは初めてだ。それは間違いないだろう。切れ長で赤茶色の目に、瞳と同じ色をしたきれいな髪。あんな特徴の多い人な

らば、一度会えば嫌でも覚えているはずなのだ。だから、面識はないという確信があった。

金髪の男の子は長年の友達なのだろうか。彼のことを舜と呼んでおまけに行動をたしなめていた。少し話が逸れていたようでもあったが、彼らはそれなりの仲なのだろうと思えた。

違和感のようなものが胸に残っているのは、どうしてなのだろうか。私と彼は初対面で、それで間違いないはずなのに。どうしてか、それが間違っていると心が叫んでいるような気がした。

「初対面ですけど」

「『まさ』ってさ、」

ふいに、大川くんが言葉を放った。私は黙ったまま大川くんを見上げる。きっと、新入生たちに私たちの会話は聞こえていないだろう。

「……あながち間違いじゃないよな」

ああ、そういうこと。私は目を伏せながら、小さく笑った。確かに、あながち間違いではない。九〇パーセント近くは当たり前なのだ。だが、その名前を呼ぶのは家族とたった一人の友人しかない。

それに何より、一番の確信は私の名前を呼ぶ男の子がいないことだろう。幼なじみだって、楓以外はいたことがない。もしかしたら女の子ではいたかもしれないが、男の子はいなかった。断言できる。そして弟と妹が一人ずついるが、決して私を名前で呼ぶことはない。いつも二人は私を『お姉ちゃん』としか呼ばないのだ。だからこそ、彼とは面識がないとはっきりと自信を持って断言できる。

「ふは、そうですね。初対面ですけど」

そう言えば、大川くんは苦笑いを溢した。初対面に変わりはないのだから、これはバツサリ切り捨てたわけではないだろう。初対面な気がしないだけで、確かに私は会ったことがないのだから。

大川くんには面識があるように見えたのだろうか。まあ、彼の目にどう映っているのも、私は困らないのだが。何より、ないことをあると言っても知っているのは当人である私たちだけなのだから。

一応、彼も私がここで嘘を吐いても何の得にもならないことはわ

かってくれているはずだ。

「そっか。あ、ここだ」

立ち止まったのは、よく使われる図書室。私たちは図書委員だったから、中の説明には慣れている。鍵は開いているから、ゆつくりと押し開いた。特に何もない部屋は、古紙の匂いが充満しているような気がする。

今度は私が説明をする順番になっていた。

身を翻して大量の図書に背中を向ける。広々とした空間に、ぎゅうぎゅうに詰まった本棚。それを見ているだけで息が詰まりそうだという子は何人もいた。新入生の中にも、顔を歪めている子がいたがそれは敢えて無視をしておいたのだ。

「ここがこの学校自慢の図書室です。奥は自習ブースになっていて、使用申請を出せばいつでも使えるようになっていきます」

そう説明をして、教室内解散を告げると新入生はたくさんある本棚に散り散りになってしまふ。

わあわあど騒ぐ新入生を放置して、自分も一冊の本に手をかけた。随分と古い書物なのだが、少し興味のある文献には変わりない。

——幕末時代に名を轟かせた『新撰組』。

今一番、私が興味のあるのが新撰組だ。

というのも、楓が歴女といえるような存在で、私に熱く新撰組を語り明かしたことがきっかけだった。まだ好きと言えども日は浅いが、楓に関連の小説やマンガ、アニメなどを教えられて私も魅せられてしまったのだ。

楓はさらにゲームまで勧めてきたのだが、今までしたことのない

ゲームの勝手がわからないからと断った。今では手近にある小説やマンガなどでたくさん知識を集めている最中だ。

新撰組だけでは飽き足らず、今や幕末全般の資料を読み漁るようになってしまったのだが。しかし、まだ歴女というには浅い知識だろう。きつと、完全に浸かってしまっている楓に比べれば口ほどにもない。狭く広くの楓とは違い、私は浅く広くを選んだ。その違いは、歴然としていた。

「三井、もう出るよ。って……また歴史小説？」

飽きないのか、と言いたげな顔をする大川くん「飽きないですよ？」と笑って返しておいた。飽きない。むしろ、自分がどんな知らない世界に魅せられていくのがわかっていいるのだ。飽きるなんてことはありえない。

「一年四組、移動します！ 離れないようにしてくださいねー」

そう叫んだ大川くんは苦笑していた。それから、先にオリエンテリングね、と言って私の頭に軽く手を置いた。目を細めて、優しい目で私を見る。その視線がどうにも苦手で、思わず目を反らしてしまった。大川くんは黙ったまま前を歩き出す。

「次、どこだったっけ」

ふいに話しかけられたせいか、大きく肩を揺らしてしまった。驚いた。慌てて返事を返す。

「芸術選択の教室前廊下を通って、視聴覚室の案内だったと思います」

「あ、芸術選択の教室前廊下か。じゃあ、中央階段上らなきゃだめ

だな」

「そうですね」

他愛もない会話を交わしながら歩く。大川くんも赤茶色の男の子には負けなくらいに大きい。目測で一八〇手前くらいだろうか。一五八の私は見上げなければいけないので、すぐに首が痛くなる。

意識を反らして、下を向いた瞬間に感じた違和感。後ろを向くと案の定、怪訝そうな顔をした赤茶色の男の子と笑顔の金髪少年と目が合った。

——もしかして睨まれてるのかな、私。

尚も背中に痛いくらいの視線を感じるのは、気のせいだと思った。いや、気のせいなどではないのだろうが。

小さくため息を漏らしてから、先を歩いている大川くんの背中を追いかけた。

「お前はまさだよ」

オリエンテーリングが終わって、教室を出ようとした。そのとき、再び例の男の子に声をかけられてしまった。確か『舜』という男の子だ。名前しかわからないその男の子は、再び私を『まさ』と呼んだ。

「私、」

——まさじゃありません。

そう言おうとしたのに、彼に言葉を遮られてしまった。どこか悲しげな色を帯びた彼の目を見ると、それ以上は何も言えなくなってしまう。

「誓った、確かに。お前と」

あ、先輩に向かってお前って言うのはナシでしょう。ほら、あの温厚で朗らかな大川くんですえ驚いた顔をしている。彼の少し後ろでは、金髪くんが口を尖らせながらこちらの様子を見ていた。

「…………この世のみならぬ」

あれ、どうしてだろう。私はこれを知っているような気がする。彼はこちらを伺いながら、続く言葉を吐き出そうとしていた。だが、その続く言葉を吐き出したのは、意外にも私だった。

「…………この世のみならぬ…………契りなどまで、頼め給ふ」

知っている。私は、これをよく知っている。私は、本当に彼と出会って約束をしていたのだろうか。しかし、これは古文に違いない。きっと教科書にも載っているような、ごく普通の一文であろう。

目の前の彼は大きく目を見開き、嬉しそうに笑った。それはまだあどけないような笑顔なのに、その目はどこか大人びたような穏やかさを孕んでいる。続いて、彼が再び口を開いた。

「めぐりても、」

「めぐりても絶えざなれば」

「定めなき」

「定めなき、世の常ならぬ仲の契りを」

「この世のことには」

「この世のことにはおぼえ侍らぬ」

「逢ふ世。やっぱり、お前はまさだよ」

泣きそうな顔をした彼に、再び抱き締められる。よくわからない。本当によくわからないはずなのに、彼の言う言葉の続きだけは頭に浮かんでいたのだ。

まるで、脳の隅にある消去不能の記憶ポケットに押し込まれていたかのように。この時を、彼に聞かれることを待っていたかのように頭に答えが浮かんできたのだ。理由はわからないが、私は過去に彼と会ってはいない。

彼と会ったことがあるのなら、言葉よりも先に彼の顔が浮かぶはずだ。それに、私が彼の名前を聞いても思い出せないほど記憶力が悪いとは思えない。それでも続きがわかるのは、自分のことであっても不思議としか言い様がなかった。

ひゅう、と金髪の少年が口笛を吹いた。大川くんは我に返ったように、おい、と声を出す。クラスの子たちはもう帰ってしまったように、教室に残っているのは私たち四人だけだった。私は彼を押し返ししながら、疑問をぶつける。

「あなた、名前は？」

彼の目が嬉しそうに細められて、薄くきれいな形をした唇が自分の名前を紡ぐ。

「舜。はらだしゅん
原田舜」

それでも、思い出せないのが申し訳ない。私が何も言わないことで感じ取ったのか、彼は眉を下げてしまった。それでも私の肩を掴んで「今はいい、これだけで十分だ」と言っでぐらぐらと揺らす。今まで黙っていた金髪の少年が、につこりと笑って私を見た。あどけなさの残る顔にピアスがやけに不釣り合いなのに、シルバーがやけに彼を大人びて見せているよう。可愛いのに、かつこい。不思議とそんな風に思わせられてしまった。

「俺、舜の親友の永倉ながくら橙太とうたつす。お見知りおきを！　ちなみに先輩のお名前は？」

関西弁だろうか。やけに訛っている。

「私は三井真咲です」

真咲だから、まさはあながち間違いじゃない。これが大川くんは言いたかったのだ。永倉くんはにこにここと笑いながら、視線を不貞腐れたような顔をしていた大川くんに向けた。

「大川創史」

原田くん、永倉くん。名前だけ聞いて思い出すのは、やはり新撰

組だった。槍の名手である原田左之助と、撃剣師範の永倉新八。確かあの二人も仲が良かったはずだ。そこまで思い出してから、私の中で何かが引つ掛かった。

『まさ』。確か、原田左之助の愛妻も同じ名前だったはずなのだ。こればかりはさすがに調べてみなければ、断言は出来ない。まさかね、とは思いながらも、今もなおどこかで引つ掛かっている。家に帰ったらすぐにでも調べてみよう。

それで剣道でも出来れば疑うべきなのだろうか。疑うとは言っても、どうして。輪廻転生や云々はよくわからないし、それがあるかどうかもわからない。自分自身が信じたことがないからだろうか。幻想的ともいえるその手段は、きっと書物の中だけで十分だと思っているからか。

「この際、仕方ありません」

「大川センパイ、真咲サン」

永倉少年、なぜ私だけ名前なのですか。

「運動部、どこが活発やろうかなーと思って。教えてください。俺と舜だけじゃ、どうも頼んなあてじゃあない」

ケラケラと笑って、部活紹介の載っているパンフレットを取り出した。運動部。意外ではあったけれども、まあ活発そうだから向いていると思う。

そういえば、大川くんは剣道部だったはずだ。二年生なのに副主将で、すごく上手だと聞いたことがある。剣道部のページで止めようとした手を掴まれて顔を上げると、大川くんは渋い顔をしていることに初めて気が付いた。

私と目が合うなり、大川くんは困ったような表情に切り替える。どうしてだろう、新入部員なんて喉から手が出るほど欲しいものではないのだろうか。その私の考えを読んだかのように、大川くんは自分の頭を軽く叩いた。

「うち、厳しいんだよ」

そういえば、大川くんは真っ黒で長さはかなり短め。頭髪を始めとする校則はきっちり守っていて、破ったことはない。

なるほど、永倉くんと原田くんは髪が引つ掛かるからだめなのか。そう言われると、確かに無闇に勧められないことを理解した。

「大川先輩、剣道部っすか」

「……ああ。でもうちは、」
「手合わせしましょーよ！ 俺、こう見えてめっちゃ出来るんつすよー」

へら、と笑った永倉くんが大川くんに吹っ掛けた。原田くんはそんな二人を見ながら大きくため息を吐いた。どうやら、これを止める気はないし口を挟むつもりも一切ないらしい。壁にもたれかかったまま、眉間にしわを寄せていた。

やっぱり、剣道が出来るとなれば疑うべきだろうか。だが、輪廻転生が本当にあったとしても彼らがそれを覚えているか。何より、同じ名字になれるものなのだろうか。やはり、全ては偶然だと考えるのが得策のような気がした。

大川くんは少し目を見開いてから『馬鹿言うな』と吐き捨てた。それと同時に、永倉くんの目が光る。それはどこか鋭くて、本当に吹っ掛けているような目だ。思わず止めようとすれば、私が原田くんに止められてしまった。

「剣道は見た目でやるもんちゃうやろ。金髪やけど、ピアスは開けてないで」

ピアスかと思っていたものは、どうやらイヤークフだったらしい。私も同じ系統のものをいくつか持っているが、全くわからなかったというか、完全に校則に違反するのをわかっていて付けてきていたらしい。

「舜、これあずかつといて。あ、真咲サンも見に来てくれるんですかー？」

ちら、と大川くんを見ると顔を反らした。あの温厚な大川くんが明らかに怒っているのだ。そりゃあもう、隠しようがないほどにこ

立腹であると言える。

永倉くんは、どうしてこんな殺気の隣でニコニコと笑っているのだろうか。よくわからないが、負ける気はないらしい。原田くんも、きつとそう思っているのだろう。永倉くんを見下ろして『鈍ってるくせに』と笑っていた。

黙って剣道場に向かって歩き出す大川くんの斜め後ろに永倉くん。その後ろに原田くんと私が並んで歩いているような状況だ。よくわからないことになってしまったが、大川くんは永倉くんと手合わせをしないと気が済まないらしい。

「まさ、部活は？」

だから、『まさ』じゃないって言ってるのに。

何も答えずにいると、彼は諦めたかのようにそっぽを向いてしまった。それから、深いため息が聞こえる。

「じゃあ、真咲って呼んでいいのかよ？」

——呼び捨てか！

何なの、今年の新入生は。それでも『まさ』よりはマシなのだろうと思う。真咲は私の名前で、『まさ』は知らない名前なのだから少し抵抗はあるが、この際仕方がないと言って自分を納得させるしがあるまい。どうせ、永倉くんだって真咲と呼んでいるのだから。

「この際、仕方ありません。その代わり、今後一切は名前を間違えないでください。わざとでも、ですからね」

自分のものじゃない名前を呼ばれても困るのだということを言いたかった。だから、あえて遠回しに言っただけだったのに。原田

くんは眉を下げて、可笑しそうに笑う。怪訝に思ったことが表情に出ってしまったのか、原田くんが片手を上げた。

前を歩いている二人は、きつと私たちのこのやり取りを知らない。きつと、この先もずっと知らないままなのだろう。

しばらくして笑いが収まったのか、原田くんが目尻を拭いながら背筋を伸ばす。こうして並んでいると、どうしても後輩には見えない。決して老けているわけではないのだが、スーツを着れば新任教師にでも見えそうだ。

「今の、あれだな。……ツンデレ？　っぽかったな」

原田くんや永倉くんといると、どうも自分のペースを乱されてしまう。いつの間にかどんどんと吞まれているような気になるのだ。それはあながち間違いではないだろう。

——何年もかけて作り上げてきた『三井真咲』が、崩れる音がした。

「凜として立ってるのが似合うから」

剣道のルールや作法は全く知らなかったのだが、隣にいた原田くんが教えてくれた。部長や部員たちが慌てふためいている中で、顧問の加野先生だけが不敵に笑っていた。その表情に不快など見えず、むしろ楽しそうだったような気さえする。

見学という理由で私たちも道場に入らせてもらって、片隅でぼんやりと眺めているだけだ。原田くんはあぐらをかいて座って、首を傾げる度にわかりやすく説明をしてくれる。やはり、彼もそれなりに出来る人らしい。

「あれ、みつちー？」

声をかけてくれたのは剣道部唯一のマネージャーである植木葉子ちゃんだった。ふ、と顔を上げれば、満面の笑みを浮かべた植木さんは隣に腰を下ろす。手に持っているのはどうやら今日のメニュー表らしい。

彼女を初めとするクラスの女の子や、ちらほらという友人は三井をいじった『みつちー』と言う愛称で呼んでくれている。この愛称を決めたのも、植木さんだった。

「あれ、部活は？」

「楓が帰ったから、ないんだと思います」

そっかー、と言った植木さんがため息を吐いた。

大川くんがすごく上手だと自慢気に言っていたのも、間違いなく彼女だ。まあ、たくさんの大会で賞を取って来ているから誰でも知っている話ではあるが。植木さんはよく話してくれる上に交遊的だからか、やけに覚えている。

彼女は確か、剣道部の部長と付き合っているのだと惚気ていたはずだが、その後のことは一切知らない。きっと、明日になれば嫌というほど話してくれそうだ。

「みつちーの隣に居座る君はやらないの？」

ふいに、植木さんが原田くんを見て微笑んだ。

「いや、遠慮しておきます。どうせ橙太が勝つから、負けて沈んでる相手とやりたくないですし」

あ、大川くんはもう負けることになってるの？

原田くんの思考回路は読めない。永倉くんをそれほど買っているのか、はたまた大川くんを見くびっているだけなのか。どちらにする、試合はまだ始まっていないのだから結果はわからない。

植木さんはケラケラと笑いながら、原田くんを見る。それはどこかからかうような目で、視線は私と原田くんの両方にやられた。

「愛しのみつちーが見てるのに、大川が負けるかなあ。あんまり先輩を見くびってちゃだめよ、少年」

——い、愛しのって……！

あからさまに原田くんの機嫌が悪くなったのはわかったが、どう言い返そうか迷ってしまった。愛しのって、大川くんは友達だからそういう意味ではそうかもしれない。それでも、そこに恋愛感情を組み込めば話は別だ。

植木さんはニヤリと口角を吊り上げて『ま、冗談だけどねえ？ 知らないこと言うと大川に怒られちゃう』と言ってくれた。少しだけ雰囲気は和らいだものの、それでも禍々しいようなオーラを放つ

ている。

しばらくすると、植木さんはもうすぐ始まるからとだけ言っどこかへ行ってしまった。そこからはもう気まずいだけの沈黙に包まれる。植木さんは大きな爆弾を投下してから消えてしまった。できるのなら、この空気をどうにかしてから消えて欲しかった。

「……真咲、部活って何やってんだよ」

答えてくれなかったろ、さつき。

そう付け加えて、原田くんは眉間に深いしわを刻んだ。そういえば、『まさ』って呼ばれたから答えていなかったのか。かと言って言いたくないわけではない。ただ、あまりにも似合わないと言われるから自分からは話さないだけなのだ。

見た目で言えば、きっと華道とか茶道とか、そういうのをイメージされがち。だが、実はそういう型のものは丸つきりだめなのだ。お淑やかに繊細な動きで、なんて言語道断。むしろ、私は体を使いたい派なのだ。

「私は弓道です。向こう側に弓道場がありますよ」

静かに精神統一をして、たった一点を狙って撃ち抜く。簡単かつわかりやすいルールと作法なのが好きだ。弓道場にいるだけで落ち着くし、何より弓を扱っている時はすごく楽しい。

また、似合わないとも言われるのだろうか。何でも思ったことをズバズバと言う子だから、遠慮はきつとしないだろう。そう思っで内心で言葉によって刺されることを予想して、密かに身構えた。

「へえ、弓道か。……真咲によく似合ってたな」

橙太の剣道試合より、真咲の弓道姿見たかった。

そう、原田くんが顔をしかめていた。まさか似合っているとされるとは思ってもみなかった。似合わないとはよく言われるが、似合うと言われたことは一回たりともなかったからか。それがどうしようもなく、嬉しかった。

一緒に弓道をしている楓には『真咲がっこいいよねえ』と言われる。それでも、私が弓道をしていると知っている人はほとんど似合わないと言っただ。見たこともないくせに似合わないとか言わないで欲しい。

「似合わないとは良く言われます。似合うというのは、初めて言われました」

ぼつりと言葉を溢せば、原田くんは笑った。それはどこか遠い目をしていて、今ではない、ずっと昔を見ているような目付きをしている。

「見たことねえけど、似合ってるよ。真咲は、凜として立ってるのが似合うから」

——ああ、わかってしまった。

彼はきつと『真咲』を通して『まさ』を見ているのだ。だからこそ、見ていなくても言葉が紡ぎ出せてしまうのだろう。それでも嬉しいと思ってしまう私は、馬鹿なのかもしれない。まんまと、嵌まってしまった。

凜として立っているのかどうかはわからないが、楓にも同じことを言われたことがある。ただ、どこか影があると言われたこともある。深く考えたことはないが、精神統一をした時にふと頭を過るものがある気がするのだ。それが何なのか、一年経った今でもはつき

りとはしていないが。

「お、始まるか。真咲、ちゃんと説明してやるから見てるよ?」
「はい、よろしく願います」

「……試衛館道場」

試合を見て思ったことは、凄い、のただ一言だけだ。原田さんの説明を聞いていたものの、途中からはもう試合に見入ってしまった。永倉さんの身軽さと、大川さんの気迫。どちらとも譲らない強さを持っていて、技術や力は同じくらいだろう。

みんな、同じなのだろう。この試合に魅せられている。沈黙は、ごく自然なことのように思えた。きっと原田くんだけが、この試合の流れをわかっていたかのよう。笑いを押し殺しながら、この試合を眺めている。

竹刀同士がぶつかる音が激しく鳴り響いている。時折、どちらからともなく面や胴、小手だのと叫ぶ。それも嫌いではなかった。こういった空気自体が、割と好きなものかもしれない。

「やっぱり強いな、大川サン」

そうか、強いんだ。

経験者の原田くんが見てそう思うのなら、間違いないのだろう。しかし、そんな大川さんと平然と打ち合っている永倉少年もなかなか強いのではないか。

というか、剣道は防具が多いからそれなりに重いはず。それに面なんて着けてしまえば、視界だって狭まることは間違いない。それなのに、普段と変わらぬような身のこなしが出来るものなのだろうか。はたまた、この二人だからこそ出来得ることなのだろうか。

「面を着けた時の視野って言えば、だいたい顔一つ分くらいだろうな」

私の疑問を読み取ったかのように、原田くんが言った。それから、

自分の顔一つ分を手で計って「こんなもん」と説明してくれる。やはり、それは明らかに狭い。それなのにああいう身軽さで動けるのは、二人がどれだけ上級者なのかを表していた。

「メーン！」

声と同時にパァン、と音がすると、赤い旗が上がった。永倉少年の、旗だった。

それを見て、剣道部の部員がざわめいた。それもそのはず。期待の新星として育てられた副将が負けてしまったのだ。それも、今日入学したばかりの一年生に。剣道部でもない、名前も知らないような金髪の少年。

大川くんはしばらく動かなかった。きっと、本人もまさか一本を取られるとは思ってもみなかったのだろう。ぼんやりとその行方を眺めていたら、視界の端から植木さんが飛び出した。永倉少年に何かを話しているようだが、彼は頑なに頭を振っている。

きっと、勧誘だろう。

副将を負かしてしまったのだ。それくらいは致し方あるまい。というか、逃す方が勿体ない。そんなことは、ズブの素人の私にでもわかることなのだ。原田くんは隣で笑いを押し殺していた。

「いや、してやられたな。こりゃあ道場破り型破りってとこだなア」

のらりくらりと私たちの背後に立ったのは、見知らぬ人だった。

振り返ると、その真っ黒な目と視線がかち合う。だが、すぐに原田くんを見てから隣に座った。

「出身道場は？」

「……試衛館道場」

「試衛館？　へえ、聞かない名だな」

「まあ、詳しいことは橙太から聞いてください」

――試衛館道場と言えば、まさに。

本当に、この二人は何か関係があるのかもしれない。幕末の世を生きた、彼らと。名だけでなく、道場の名までも出てしまえば嫌でも疑ってしまうものだろう。まさか、とは思ったが、これは本当に調べてみなければならぬかもしれない。

とはいえ、彼が本当にあの『原田左之助』の生まれ変わりだったとしても、私が『原田まさ』である証拠がない。あの言葉遊びにしても、調べれば全て古典の教科書から出てくるだろう。やはり、そこまで調べるのは難しいのかもしれない。

「どうだ、君も。あいつと一緒に剣道部に入らないか」

その言葉に、原田くんは面食らったような顔をした。

「いや、俺は別に。真咲、そろそろ帰ろう」

あ、逃げた。

一緒に立ち上がると、植木さんがこちらに走ってきた。その前を走る、必死な形相をした永倉少年。植木さんの性格を考えると、半ば無理やり入部させられそうになっていたのだろう。その顔には疲労が滲み出ている。

それでも、試合後にしては元気すぎるのだろうか。

舜、と永倉少年が原田くんの後ろにするりと身を隠してしまった。隠れるほど原田くんが大きいというのもあるのだろうが、永倉少年が比較的に小さいのか。よくわからないが、とにかく永倉少年の隠れるサイズにぴったりなことだけはわかった。

原田くんが眉を下げながら永倉少年を引っ張るが、頑なに出て来

ようとはしない。じりじりと詰め寄って来るのは植木さんとさきほどの先輩らしき人。大川くんは面を外しながら、悔しそうに唇を噛み締めていた。

思わず声をかけようとは思ったが、きつと今は彼にとって何の慰みにもならないだろう。それどころか、癢に障りかねない。あえて何も言わないのが得策なのだろうと身を翻した。どうしようもなくやるせない気持ちになるのはわかるけれど、そんな時にかける言葉は一つも見つからなかった。

「原田くん、永倉くん。みっちーが条件でも嫌って言うのかしらねえ？」

「はい？」

なんと、植木さんが出した名前は私のもので。それに素早く反応したのは、原田くんだった。まるで苦虫でも噛み潰したような顔をして、植木さんの方を見ている。永倉少年は隠れているせいで何も見えないが、原田くんの表情だけはハッキリと見てとれた。

きょとん、としている先輩らしき人。その後ろでは、大川くんが植木さんをこれでもかというくらいに睨み付けていた。

「たまになら、みっちーの弓道姿見れるわよ？」

確かに。弓道着のままここを通ることだってあるし、用があれば上がらせてもらうことだってあるのだ。だが、それが入部条件とはどういうことなのか。それでもあえて何も言わないでいよう。

小さくため息漏らすと、後ろから笑い声が聞こえた。

「そんなの、弓道部に入ったら見放題だぞ」

植木さんがそれをわかってなかったことに驚きです。普通に考え

てみれば、ごく当たり前の話ですが。植木さんは顔を真っ赤にしながら「陸は黙っててよう！」と声を荒らげた。

どうやら、彼が部長であり植木さんの彼氏らしい。ぼんやりと成り行きを眺めていたら、不服そうな大川くんがこちらへずんずんと大股に歩いてくる。それから、ガツと永倉少年の首根っこを掴んで原田くんの後ろから引つ張り出した。

「ちゃんと結論言えよ」

なかなか、鬼らしい。永倉少年は原田くんに預けていたイヤークラフを着けてから、ぺこりと頭を下げた。

「俺、まだまだ遊びたいからすみません。それに俺はそんなに真咲サンに執着ないし」

へらつと笑った永倉少年が言った。ぽかんとしたのは植木さんと原田くん。そんな執着を持たれても困るから、私は特に言い分などなかった。あからさまに『俺は』と付けた意図をわかってか、大川くんと先輩は原田くんを横目に見ている。

できれば永倉少年、黙っていてくれないかな？

あんまり話されてしまうと私まで立場がなくなるような気がしてならない。それでも植木さんは『まずは原田くんから』と引き込む相手を変えたようだった。

「原田くんは入るよね！ みっちーにいいトコ見せたいもんね？」

そうきたか。

確かに原田くんの試合をやっている姿も見てみたいものだとは思ったが。それで部活を決められても困るので、私は何も言わないことにした。というか、知らないふりを決め込んだのだ。明らかに原

田くんが私を見たが、目を合わせないことにした。

「真咲が入って欲しいって言うなら入りますけど」

——ストレート。私には受け止めきれませんすみません。

この場合、原田ピッチャーだとすれば私はキャッチャー。この言葉がボールなのだとしたら、私は受け止めきれずに即座に飛び退いて避けるだろう。それほど、苦手なものだった。言葉はキャッチボールだと言いが、受け止めきれないものは仕方あるまい。

「私を間に挟まないでください。あくまでも部外者です」

さらりと言って退けてしまえば、みんなが笑っていた。原田くんには頭を撫でられて『やつぱ可愛いよ、お前は』となぜそう思ったのか非常に理解しにくいことまで言われてしまう。なぜ。

「一人で大丈夫か？」

「部外者やったら、こんなところおれへんやん普通」

ケラケラ笑っていた永倉少年が、お腹を抱えながらそう言う。確かにそうかもしれないけれど、私がこういった話では部外者であるのも確か。それなのに、なぜか巻き込まれているのが妙に気に食わなかった。

永倉少年は竹刀を返して一礼をして、原田くんを促す。もちろん、原田くんは私を早く帰るぞと促していた。仕方なく植木さんと部長さん、大川くんに頭を下げて道場をあとにした。

しばらく歩くと、門に着いた。二人がどちらの方向へ進むのかわからないので、様子を見ながら一番後ろをゆっくりと歩く。すると、原田くんが不意に振り返った。

「真咲、家どっち？」

「電車なので右側です」

「そ。俺らも電車だ」

穏やかな笑みを携えて、彼はまた歩き出す。永倉少年には手招きをされ、そちら向かえば「なんでそんな離れて歩いてるんすかー」と言われる始末。どうやら、完全に懷かれてしまったらしい。

歩いている最中、沈黙が流れるのが多々あった。それは気まずいわけでもなく、どこか心地よく感じるような沈黙で。ふと、脳裏を過ったことを聞いてみたいと思った。

「……二人とも、剣道の有段者だったんですね」

試衛館道場と言った。

それは紛れもなく、過去にあったもの。今はそんな名前を聞かないようになってしまったもので、それが今ないとわかれば、彼らは手のひらに、じわりと汗が滲む。それを忘れるかのようにな、ぎゅっと手を強く閉じた。

「そう！ 俺の親父の道場なんですよー！ ちなみに親父が師範代やってー」

永倉少年のすつとんきような声が、その場に大きく響き渡った。原田くんが小さくため息を漏らしたのがわかる。それは、どうやら嘘ではないらしかった。

「橙太が五歳からずっとやってて、俺は試衛館がこっちに来たときだから……十二からか」

こっちにきた時、ということはやはり元は関西の人なのだろうか。試衛館道場は、永倉少年のお父さんが師範代をしている。ということとは、やはり前世の話と関連性などないのだろう。きっと、全て私の思い違いなのだ。

そう自分に言い聞かせながら、道を歩く。隣には原田くんと永倉少年が歩いている。黒髪と赤茶髪の隣にある永倉少年の金髪が、やけに目立つような気がした。

「元は大阪やって、母さんの仕事の都合で一昨年にこっち移動したんす」

「あ、やっぱり大阪なんですか？」

「そうそう。俺が住んだのは田舎やけど市内はよお行つてたから、それなりに詳しいですよ」

「へえ。一度は行つてみたいですね、大阪にも」

「めっちゃいいところですよ。メシは美味しいし、みんなおもしろい！

ただうるさいし、せつかちなんがたまに傷ってやつやと思うけど」

こっち来てからそれがよおわかった、と永倉少年は陽気に笑う。
なんだか楽しそうで、きつとたくさんの思い入れがあるのだろうと確信した。それにしても、一昨年にこっちに来てても大阪弁は抜けないものなのだろうか。

まあ、なんだかんだ言っても話している永倉少年が楽しそうなのでよしとしておくことにした。それにしても、三人だともも原田くんの口数が減っている気がする。

ちらりと横目で見れば、じつとこちらを見ていた原田くと目が合った。彼はごく当たり前のように目を細め、口角を持ち上げる。それから、優しい手付きで私の頭を撫でた。

「どうした？」

——どうした、というわけでもないですが。

はあ、と隠しきれずにため息を漏らす。それを見てからか、永倉少年が盛大に笑い声を上げた。

「ふっ… ははははは！ 舜、恥ずかしいんか！」

恥ずかしい？

キョトンとする私を見て、目尻を拭いながら永倉少年が体を前に屈めた。どうやら、お腹が擦れるほど面白いらしい。私にはさっぱりわからないのだが。

だが、見上げればらしくもなく赤面した原田くん。片手で口元を覆い、少しでも顔を見られないようにガードしている。

ふいに『何か』が脳裏を過った。その『何か』は本当に一瞬で、識別する間もなく消えてしまった。

「ほんま可愛いな、舜は。真咲先輩、こいつ照れてるんっすよ」

「…照れる、ですか」

「何せ、探し求めた子がやっと見つかってんから」

昔から、ということに繋がっている話らしい。それは私じゃありませんと言いきつい雰囲気、つい口をつぐむ。

「橙太！　んな話ばっかしてんじゃねえよ！」

原田くん、真っ赤な顔のままだと、全く怖くありませんよ。

心の中でそう言ってから、また永倉少年と数回やりとりをしていた。大阪の話や、道場の話。原田くんはやはり黙って聞いているだけだった。

そうこうしているうちに、いつの間にか駅に到着していた。

カバンから定期を出して、それを改札口に通した。原田くんと永倉少年もずるりと改札口を通り抜ける。

目の前には、階段。

原田くんに聞かれて駅名を言えば、どうやら二人の最寄りより二つ前が私の最寄り駅だった。ということは、私が一番先に降りるということ。ここまで来れば、特に他に気にすることなどなかった。

「真咲、もう暗いけど一人で大丈夫か？」

心配そうに言ってくれるのはとても有難い。だが、まだ暗いといふには至らないほどの微妙な明るさだ。それに最寄り駅から自宅まではそう遠くもない。

何より、原田くんは年下。いくら男の子とは言えども、私だって少しは心配なくらいだ。

「大丈夫です。原田くんこそ……いえ、永倉少年もいれば大丈夫ですね」

これだけ賑やかだと、きつと不審者だつて寄るに寄れないことだろう。

ふ、と笑えば永倉少年はあからさまに眉を寄せる。原田くんは反対隣で肩を揺らしながら、笑い声を押し殺していた。しばらく考えたあと、ゆっくりと自分の口を片手で押さえた。理由がわかった。

「何なんつすかー、その少年で！ 俺、いちおー真咲先輩と一個しか変わらんのにい」

「すみません、つい」

「ついって何ー！」

ぎゃんぎゃんと囁み付いてくる永倉少年を流して、原田くんに目をやる。彼は依然として笑ったままで、楽しそうに私たちに目を向けていた。

「少年、か。いや、あながち間違つてねえよ」

それだけ言つて、一足先に階段を降りていく。

まだ真新しいエナメルが目の前で揺れていて、そこには小さなキーホルダーがついていた。不自然な、ビー玉のようなキーホルダー。透明なガラスの中では、ラメがキラキラと光を反射している。

私より一番後ろを、少し駄々を捏ねるようにぶつくさ言いながら永倉少年が続く。彼らは二人とも、私の視線の先になんて気付くことはなかった。

「じゃあ、さようなら」

ぺこりと頭を下げると、原田くんは柔らかく笑った。永倉少年は屈託のない笑みを溢しながら、ありがとうございましたー、と関西弁で訛ったお礼を述べた。こちらこそ、なんて返すのは定型文のよ
うなもの。

「またな。気をつけて」

再び頭を下げたあとに降りてから、私を残して出発する電車を見送った。きつと、あと少しだけ彼らは何かしらの話題で盛り上がるの
だろう。

今日は少し疲れた。

何年もかけて作り上げた仮面が剥がれないようにするのに必死だったのは、きつと気付かれてはいないだろう。

小さくため息を漏らした。

「…疲れた、」

きつと明日からは、波瀾万丈ともいえる日々になることを。何年もかけて作り上げた仮面が一瞬にして剥がされることを。この時は
まだ、全く知らなかった。

銅

【完】

第一章
赤

「信じてくれ、俺を」

「なあ、」

目の前には大きな背中がある。それが誰のものなのか、私は知っている。

その確信はあるのに、思い出せない。まるで記憶を箱の中に入れて、鍵で厳重に封じ込めているかのように。

淡い映像。

わかるのは、その背中は濃紺の着物を羽織っていること。腰には、たった一本の刀が差してあること。同じ濃紺の髪紐で結った、少し長い髪。

今にも消えてしまいそうな儚さが、そこにはあった。

「、俺は」

名前を、呼んでいるのだろうか。だが、その名が私へ届くことはない。

彼の声は、驚くほど小さかった。その声に落ち着きの色があることは、確かだった。

どうして。どうしてそんなに儚いんですか。消えてしまいそうなんですか。

聞きたくて、思わず手を伸ばす。一瞬は濃紺の着物に触れるものの、その手は空しくも宙を掴んだだけだった。

「愛してるよ」

たったそれだけ。

ありふれた、単純な言葉なのに。なぜか胸に温かく染み込んでく

る。優しい温もりに包まれ、目を細めた。こんなにも嬉しいのは、どうしてなのだろう。こんなにも愛おしいと感じたのは、きっと初めてだった。

家族に感じる感情や、親友に感じる感情とはかけ離れたもの。それを今、初めて感じたのだ。

——ねえ、一体あなたは誰ですか？

初めて愛しいと思った、あなたの名前を私は知りたい。教えて。例えその儚さがあなたの人生を物語っていようと、なぜか離れないという自信があった。

この身こそ離れてしまおうとも、心だけは絶対に離れないと。絶対とは言いい切れないはずなのに、妙な『絶対』の自信がそこにはあった。

「すぐに戻るよ。約束する」

振り返らない背中。

「だから、待っていていちゃくれねえか」

請うような声に、私は無意識ながらも頷いていた。

何度も何度も頷いて、待っていますと繰り返す。

それは、私が話しているわけではなかった。

確かに意識や思考は同じなのだが、体は別の主がいるらしい。自然と、涙が頬を伝う。

構いません、私はいつまでも待ち続けます。と。彼女はそう言っ
て、何度も何度も繰り返す。

待ち続けます、待っていますから。それはまるで壊れたテープレ
コーダーのようで、どこか滑稽だった。

「信じてくれ、俺を」

彼が、ゆつくりと振り返る。
逆光で、顔は見えなかった。

「…わかんない」

そこで目が覚めた。

まばたきを数回繰り返してから、自分の目尻を伝う涙を拭った。完全にリンクしていたらしく、枕が涙に濡れていた。汗もかいている。

「真咲、大丈夫か!？」

焦った顔をする、私とは全く似ていない顔が覗き込んでいた。重い体を起こしながら頭を押さえる。

「平気。それより真澄、どうして私の部屋にいるの？」

高校に上がったと同時に部屋が分かれたはずの兄が、どうして私の部屋。しかもベッドの縁に座っているのだろうか。寝起きのせいで働かない頭では、全く理解できない。

兄、真澄はにこにこ笑いながら、いいじゃん、と軽く流してしまった。それから、持っていたタオルを私の顔に押し付ける。拭け、ということらしいので、それを素直に受け取っておいた。

「ほら、俺たち双子なんだしさー」

「正しく言えば兄妹だから、双子ではないけどね」

真澄の誕生日は四月九日。私の誕生日は、四月一日。学年は同じだけど双子ではないし、何より誕生日は真澄の方が一年近く早いのだ。

明るく子供みたいな兄の真澄に対し、冷静で大人みたいな妹の真咲。

正反対だね、きつと真澄のせいで真咲はしつかり者なんだね。と両親は笑っていた。確かにそうかもしれないが、嫌だと思わない辺り、私が真澄のことをそれなりに好いているということだろう。

「それより、嫌な夢でも見たのか？　かなりうなされてたみてーだけど」

急に真面目な顔をして、真正面に座り込む。どうやら、答えるまではそこから動く気がないらしい。ちよつとね、と濁しても何もわからないと咎められた。

こういう時に、真澄は兄の顔をする。普段は子供のくせに、と毒吐いてもどうしようもないのだが。

「…わかんない。嫌な夢、ではなかった気がするけど」

そう言うってから布団を抜け出して、制服に手を伸ばす。まだ座ったままの真澄は何かを考え込むようにしながら、やっぱり笑った。どことなく永倉少年と似ているような気がするのは、私だけなのだろうか。

それから「いつかは、わかるといいな。先に降りてく」とだけ言っただけで部屋を出て行った。

真澄の高校は私よりも近い場所にある。とは言っても、駅六つ先の私に対して、駅三つというだけ。だからというわけでもないが、登校は途中まで一緒に行くようにしている。

すぐに制服に着替えて、全身鏡の前で身嗜みを整える。それからスクールバッグを抱えて、階段を駆け降りた。時刻はもう七時十分。電車に乗るのは七時四十分。時間はなかった。

「真咲、おはよう」

「おはよう」

優雅にコーヒーを啜っているお母さんに声をかけて、朝食が置かれているテーブルに座った。隣にあったお弁当をすかさずカバンの中へ押し込んだ。

「ふふ、真咲が寝坊なんて珍しいわね」
「そう？ ごちそうさま！」

急いで食パンを口に詰め込んで、一緒にあったミルクティーで流した。それから洗面台に向かって歯磨きやその他諸々を済ませてしまふ。

どうやら真澄は部屋で荷物を用意しているらしかった。
七時三十分。二人して家を出て駅へと向かった。

「創史、負けたんだってな。相手、一年らしいじゃん」

ふ、と真澄が呟いた。

「うん」

大川くとメル友なのだ。一年の時からずっと仲がいいらしい。それは、真澄が剣道部でそれなりの成績を残しているからだろう。大川くんが優勝した試合で、真澄が準優勝だったのがきっかけだと聞いたことがある。

真澄が剣道部だということを、すっかり忘れていた。大川くんは私と真澄の関連性を知らないらしく、私も言う必要がないと判断して話したことはない。真澄も、言っていないらしかった。

名前の共通点こそ多いものの、性格は丸きり正反対なのだ。言わずして判れ、と言う方が難しい。だからこそ、大川は何も言っていないのだろつ。

二人でいつもの電車に乗り込み、満員の中でもいつものように扉の横に立っていた。人とぶつかることを気にしているのか、いつも真澄は私を庇うように立つ。きっとそれが、彼なりの優しさなのだ。

「んで、その一年は入らないんだって？」

そこまでは、私に聞かれてもわからない。

あの時、永倉少年は入らないと言った。それでも、いつかは気が変わるかもしれないし、何より剣道部が諦めそうにはない。だから、一概に入部しない、とは言い切れないのだ。

「まだわからないよ。それに、私は剣道部じゃないし」

「はは、ごめん。真咲は弓道部だもんな」

私よりも二十センチも背の高い真澄に頭を撫でられた。こういう時は嫌でも兄なのだろうと思ってしまう。

スクールバッグを邪魔にならないよう前に抱えて、真澄の作ってくれる隙間に身を収めた。もうすぐ、真澄の降りる駅に着いてしまう。

カバンの中には、私のお気に入りのキャラメルが入っている。箱は、二つ。もちろん、一つは真澄のために買っておいたものだった。それを取り出して、真澄のブレザーのポケットに押し込んでやる。

「んー？ 何？」

見ていなかったのか、真澄は笑いながら首を傾げた。

「キャラメル。好きでしょ」

「一つだけ銀紙から剥いて、真澄の口に入れた。私も自分の分を一つだけ剥いて口の中に放り込んだ。」

「おお、ありがとな」

「私こそ、いつもありがとうね」

「ふは、いいって。真咲は女の子なんだから」

それから一駅。

真澄は元気に手を振りながら電車を降りて行った。きっと今日もあの元気で一日を過ごすのだろうと、そんなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0628x/>

輪り廻る時空の中で

2011年11月20日15時15分発行